

枯れ芒

池松 孝子

秋の七草のひとつである若い芒の穂には、しなやかな美しさがある。そんな芒も冬になると葉は枯れ、茎も折れ、次第に侘しい姿になる。寒風に晒されたその姿は「枕草子」でも老人の白髪にたとえられている。

枯れ芒で思い起こすのは京都府八幡市の背割り堤である。背割り堤とは二つの川が合流して隣り合って流れるとき、流れの異なる二つの河川の合流を滑らかにするため川と川の間设置的に設ける堤防のことである。八幡市の背割り堤は桂川、宇治川、木津川が合流して淀川となるあたりにある。

この三川合流点は京都、大阪間の交通の要衝である。豊臣秀吉が主君織田信長の仇を討った戦いも、鳥羽伏見の激戦地もここであり、時代の節目に戦いの場となった所だ。

天正十九年（一五九一）二月、利休は秀吉に堺の実家に蟄居謹慎を命じられ、京から堺に下った。そのとき、利休と親交のあった武将たちは秀吉を恐れて誰一人現れなかった。その日、淀川の岸辺に利休の舟を見送ったのは、利休の高弟、細川忠興と古田織部であった。最高権力者秀吉の勘気に触れ、自刃を前にした利休との別れを想像するだに辛い。

二月極寒の淀川河川敷である。人の背丈ほどもあったろう枯れ芒茂る河原で、理不尽な死に向かう利休を前にした三人の胸の内を思うと私も辛くなる。忠興と織部に、武士ならではの気骨と茶人の気品を痛いほど感じる。この時の三者の心情には堪らない。

あり余ることばの果ての冬芒

政野 すす子

私はその近くのアサヒビール大山崎美術館の建物、美術品が好きで何度も訪ねている。背後に天王山を控えた所に位置する。そのテラスから大阪方面を望む景色は、歴史を超えた思いを強くさせるものがある。時に枯れ芒の中、京を後にする利休を思い浮かべる。

翻って、今の淀川河川はあまりにも変化していて、かつてを偲ぶことは出来ようもない。

三川合流地点のあたりは、数キロの桜堤として、また公園として整備され家族連れの憩いの場となっている。